

畜産

【肥育牛】—血液検査について その1—（俵牛づくりより）

必ず検査したい項目は、ビタミンAと総コレステロール（TC）及び肝機能（ γ -GTP）です。検査データは、牛の品種、血統、月齢、性別、季節、飼料の種類を勘案して、更に牛の状態、飼料摂取量など総合的に判断します。データだけで判断しないようにしましょう。

1 農場の状態を把握する

①農場主の改善目標を把握する ②枝肉成績の課題を明確にする ③飼料給与を把握する（前期、中期、後期の飼料給与状況、飼養管理の問題点） ④その他成績の収集（牛や農場を見ること、月齢、血統、枝肉成績の検討、定期検査は生後17～18月齢と21～22月齢で十分）

2 血液検査の意義とポイント

- ① ビタミン関連：ビタミンAについては別に詳しく述べます。VA 推奨値30～60UI/DI（生後17～20か月齢の間）
- ② エネルギー関連：（血清総コレステロール TC）肥育前期100～120mg/dl 14ヵ月以降130mg/dl以上、18か月齢以降は150mg/dl以上が目安になります。コレステロールが高くてもビタミンAが高いと良い肉質にはなりません。脂肪分の多いエサを与えると上昇します。血統により高い血統と低いものがあります。出荷近くまで高い総コレステロールを維持するようにしましょう。
- ③肝機能障害：（血清 γ -GTP、GGT）30IU/L以下 濃厚飼料を多給すると γ -GTPが上昇し肝機能障害が起こります。また、ビタミンAの制限やノコくず肝の発生の多い農家で高い例があります。

3 注意点

結果は品種、血統、月齢、性別、季節、飼料の種類、牛の状態、飼料摂取量、枝肉成績を勘案して、総合的に判断しましょう。

【繁殖和牛】—日常の管理（肉用繁殖牛飼養管理の手引き基礎編）—

1 飼料給与

牛が1日のうちで最も多く採食する時間帯は、日の出前後と日没前後であるため、給与回数は、早朝と夕方の2回で十分です。乾草は長いままでの給与でかまいませんが、稲わらの場合は食べ残しを防ぐため、カッターで3つ切りにして給与する方法もあります。また、サイレージは、2次発酵し易く下痢などの要因となり易いので、新鮮なものを与え、残飼は取り除きます。

群飼の場合には、牛には角の突き合いによる順序が発生し飼料占有につながることから対策として、除角をしたり、飼槽の数を多くしたり、スタンションの利用やロープで繋いで給与するように工夫します。

2 水の与え方 水は牛の発育に重要です。常に新鮮な水が飲めるようにしておく必要があります。単飼や繋ぎではバケツでも十分ですが、群飼など頭数が多い場合はウォーターカップやサイフォン式の水槽にします。

3 健康状態の観察

毎日の牛の観察は、1年1産の達成や病気の早期発見において、最も重要な仕事です。主な観察は、早朝や飼料給与時に行うことが重要です。

- ① 食欲はあるか、病気、発情時や分娩に近い時に食欲は低下する
- ② 反すうをしているか、食滞や鼓脹症でガスがたまった場合に反すうをしなくなる
- ③ 鼻鏡が乾いていないか、熱がある場合に鼻鏡が乾く
- ④ 呼吸は荒くないか、肺炎や鼓脹症などの場合は呼吸が速く荒くなる
- ⑤ 腹が膨れていないか、鼓脹症で第1胃にガスがたまった場合、腹がふくれ呼吸も浅くなる
- ⑥ 糞や尿の状態はどうか、下痢や胃腸炎などの時は糞が泥状か水様で悪臭があり、固いコロコロは便秘である。また、尿が赤くなるのは血球や血色素が混じっている場合がある
- ⑦ ヨダレを出していないか、イモ類などの飼料が食道につかえた場合には口から多量のよだれを出し呼吸も浅くなる
- ⑧ せきや鼻汁は出していないか、鼻炎や気管支炎が疑われる

4 体の手入れ

牛の手入れは、体表の血行を良くし、毛づやも良くなり、シラミなどの寄生虫も発見できます。定期的に手入れを行うことにより、人と牛とが接触する時間が長くなり、飼い易い牛になります。特に、育成牛では重要です。

手入れの方法は、金グシやワラ束などで、毛の流れと反対方向にこすってアカなどを浮き出させてブラシで取り除きます。尻や腿などについた糞の固まりは金グシで取り除き、取れない場合には水やお湯をかけて柔らかくして取ります。

【酪農】一子牛の寒さ対策、根室振興局より一

1 気温の変化に弱い子牛

子牛は、成牛に比べ寒さに弱く、体温調節能力が劣ります。外気温の日内変動や週内変動が激しい時期は、子牛にとってストレス要因が多くなります。そして、子牛の風邪や肺炎発生の危険性を高めます。また、冷気が子牛の腹を冷やしてしまい、下痢の原因となる場合もあります。

(1) 朝晩の対策が必要

子牛は、気温 13℃以下で寒冷ストレスを感じ始めます。

(2) 敷料の交換のタイミング

敷料が濡れていると体熱が奪われてしまいます。腹を冷やしてしまい、下痢の原因にもなります。夕方の作業時や作業が終わる頃に敷料交換や敷料の追加を行い、清潔で乾いた敷料をたっぷり入れるようにしましょう（写真1）。

(3) 保温

夕方の作業時や作業が終わる頃に、湯たんぼや電熱ヒーターを用い保温しましょう。

(4) すきま風を防ぐ

牛体に直接風を当てると体温が奪われます。板などで子牛の側面3方向を囲うようにしましょう。

(5) 換気も忘れずに

保温やすきま風を防ぐことと合わせて、換気も重要になります。天気の良い日の昼間は、積極的に換気をしましょう。